

いわて花巻空港60周年 その軌跡をたどる。



開港から60周年を迎えた「いわて花巻空港」。県民待望の空港ができて以来、滑走路の延長、国際定期便就航、新ターミナル開設と着実に施設拡張してきました。今回は、県勢の発展に大きく寄与した空港の変遷について振り返ってみます。

写真左上：昭和52年に就航した大阪便の第1便・YS-11型機は花巻と大阪間を2時間半で結びました。

開港60年の歴史

昭和39年2月15日、県民が待ちに待った「いわて花巻空港」が開港しました。昭和36年12月から3年の月日を経てターミナルビルと1,200メートルの滑走路が完成。同年4月1日には、同空港と東京国際空港（羽田）を結ぶ国内定期便が就航し、その1番機を見送る約1,000人の見物客がターミナル屋上に集まったといえます。大阪線・札幌線と定期便の相次ぐ就航に伴い利用客も増加するなか、昭和58年には滑走路を2,000メートルに延長し、ジェット機乗り入れも実現。その後、平成17年には滑走路を2,500メートルに延長し、平成21年には現在のターミナルビルがオープンしますが、平成23年3月に東日本大震災が発生し、「いわて花巻空港」は広域防災拠点として重要な役割を担います。

一方で、復興の後押しをすべく同年5月にフジドリームエアラインズ（以下FDA）による名古屋線が就



開業当時のターミナル全景

航。県営名古屋空港での乗り継ぎも含めて、全国への航空ネットワークが拡大しました。

平成30年8月1日には、同空港初の国際定期便となる台北便が就航。翌年には上海便も就航し、インバウンド増加が期待されるなか、新型コロナウイルス感染症の拡大により、両路線は運休を余儀なくされます。

その長引くコロナ禍の中で運航をスタートしたのが、令和3年のFDAによる神戸便です。就航直後は62日間の運休を強いられ、利用率も36パーセントに留まっていましたが、コロナの沈静化により、徐々に利用客も増加傾向へ。また、令和5年5

月には台北便が再開されました。

東日本大震災の経験を 未来へ生かす

そして、忘れられない節目となった出来事が平成23年に起こった東日本大震災です。同空港は旅客ターミナルビルに被害があったものの、基本施設や航空灯火の運用にかかる被害はなく、震災発生から2時間後には空港運用を再開。関係諸機関の垣根をこえた連携によって、広域医療搬送や航空輸送の拠点となりました。岩手県土整備部港湾空港課総括課長・伊藤秋彦さんは、その当時空港が果たした役割について、こう話します。



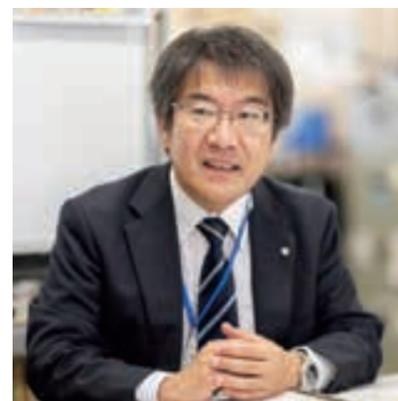
「スカイフェスタなど飛行機を眺めに来るだけでもいいので、お気軽に」と岩手県・伊藤秋彦さん。

重要な役割を担ったのです。除雪車両の格納庫が物資の保管に役立ちました。また、仙台空港が津波で被災し東北新幹線も不通になり、関東圏と東北を結ぶ交通機関の代替機能としても重要な役割を果たしました。こうした震災時の経験は、現場従事者や関係者にとって防災拠点としての意識醸成となり、現在もその認識を共有いただいています。

振り返れば、平成10年度から進めてきた平行誘導路が概ね完成していたこと、平成22年8月に広域医療搬送訓練を実施していたことなど、非常時に備えた事前の取り組みが、震災翌日からの緊急対応に大きく役立ったといえます。

日常を支える 交通手段をめざす

このように、観光やビジネスのみならず、防災拠点としても役割を担



「関西圏へは便数も多く、出張での利用者増も期待したい」と岩手県・藤島修さん。

現在の路線を維持・拡充し、航空ネットワークをさらに充実させることが今後の課題です。就航先からの

需要に支えられ、令和5年の台北便再開後の利用率は90パーセントを超えています。



「スカイフェスタ」は、普段入場できない空港の見学や特殊車両に間近で触れ合うことができる貴重な機会です。

観光誘致に取り組むとともに、花巻空港には1150台分の無料駐車場があることから、県外や海外に花巻からダイレクトに飛べる利便性を県民の皆さんに体感してほしいです」と藤島さん。ビジネスと観光の両面で、双方方向の利用者増に取り組んでいきたいと話します。

すでに60周年記念企画チャーター便も運航されていますが、毎年行われるスカイフェスタ（令和6年は9月28日）も人気イベントの一つです。ふだん目に触れることが少ない機材展示も予定されているので、空港をより身近に感じる機会として訪れてみてはいかがでしょうか。